



——弁慶と牛若の立ち回り。
牛若は刀を抜かず、軽やかに大長刀をかわすばかり。
さんざん翻弄され、ヘトヘトになる弁慶。

弁慶 (荒い息で) この弁慶を、かほど手こずらせた者、お主が初めて。

さぞや名のある武門の出と見た。どうか、名をお聞かせ願いたい。

盗っ人に明かす気はない。

牛若 そう申されるな。この通り、頭を下げるほどに。

弁慶 では、教えてとらす。我こそは、かつて平家一門に滅ぼされた源

氏の棟梁・源義朝が末の子、牛若じゃ。

弁慶 源氏の御曹司にござったか！これは何たる失礼を。平に平に（ト

地面に頭をこすりつける）

牛若 悪いと思うなら、刀を奪うは今宵限りといたせ。

弁慶 はッ！仰せの通りに。

——上手から並盛、大盛、山盛、平家の兵たち。

並盛 おお、あそこじゃあそこじゃ。

弁慶 加勢を連れて参ったか。御曹司、ここは手前にお任せあれ。

牛若 助けて貰ういわれはない。お前こそ早う逃げよ。



大盛 誰じゃ、貴様は！

山盛 こ奴の仲間か！

弁慶 仲間ではない。このお方の家来様じゃ。

牛若 おい、家来にした覚えはないぞ。

弁慶 まあ、細かいことは抜きにして。さ、お早く。

牛若 仕方ない。先を急ぐ身ゆえ、この場は任せた。

——牛若、橋を渡って、上手へ走る。

並盛 あ、待て！

弁慶 おっと、これより先へは一步も通さぬ。どっからでもかかって参

れ！

大盛 ええい、斬れ斬れ！

兵たち おおッ！

——兵たち、弁慶を取り囲み、刀を構えた瞬間……幕が下りる。



政子 父上、ありがとうございます。

時政 なーに、物は考えようじゃ。この先、平家の天下がひっくり返らぬとも限らぬ。さすれば今度は、頼朝殿が世に出る番。政子、そなたは源氏の跡継ぎを生む大事な身。夜露は体にさわる。ささ、早う屋敷へ戻ろう。

政子 はい、父上。では、頼朝様。

頼朝 ウム。

時政 頼朝殿、いやさ、婿殿。いずれ平家打倒の相談など、じっくりいたそうぞ。

頼朝 ははッ！

——時政と政子、下手へ去る。

頼朝

……思いがけぬ流れとなった。子供の話には驚いたが、お陰で時政殿が味方についてくれた。北条配下の武者は、およそ三百。平家を倒すには到底足らぬが、源氏再興の狼煙を上げる火種とはなる。伊豆に流され、十五年か。ようやく俺も、日の目が見れそうじゃ（ト不敵に笑う）

——頼朝の笑い声、続くなか……舞台暗転。